



「あら、もう学校終わり？」

「部活が休みなんで……」

「葵と一緒に帰ってくれば  
良かったのに」

「はは、多分嫌がりますよ」

同級生である葵のお母さんだ。

ご近所という事もあり、  
昔から可愛がってもらっていた。

俺が家庭の事情で  
一人暮らしを始めてからも  
何かと面倒を見てくれる。

この人は

朝霧 絵美子

(あさぎり えみこ) さん。



「今日はおご飯食べに来る？  
自炊も大変でしょう」

「えっ、でも悪いですよ。

葵もいるんじゃない」

「あの子は夜までバイト。  
遠慮いらさないわ」

「旦那さんも  
いらっしやるでしょっ」

「どうせ残業よ」

「でも……」



「何よお……」

「おばさんだけじゃ不満  
だつての?」

「い、いえ!」

「ぜひご馳走になります!」

葵も旦那さんもおらず、  
絵美子さんと二人きり。

それが何だか気恥ずかしく、  
後ろめたくもあつた。



「よろしい。ちやんとお腹  
空かせてくるんだよ」

「楽しみにしてます！」

俺は絵美子さんに対して  
親愛以上の念を持っていた。

じゃあね、と玄関に向かう  
後姿が劣情を誘う。





多かつたら  
残して  
いいからね

ゆっくり  
食べなさいよ!

ガツムシヤ  
モグパク!!

モグツ!?!  
ガフガフ!



またまた  
上手いね〜!

もろ

絵美子さんの  
ご飯ならいくらでも  
入りますよ!  
お店より全然  
美味しいし!



奏ちゃん

ケツ揉みてえ

いやほんと  
しかも優しいし  
綺麗だし……



ちよつと  
お酒飲んでも  
いいかしら?

あつ  
どうぞどうぞ!



何よ  
慌てて……

ドキッ

えっ!?!  
アツハイ  
何でしょう!?



別にそんな……!

もう子供じゃないですし!

ご飯つぶ付いてるよ



何考えてんだ俺は……

気にせず飲んでください

ごめんね

最近眠れなくてさ

奏ちゃんの前ではって思ってたんだけど



そ、それってまさか……!!

あつ そういう意味じゃなくて……!!



そっ それに!

好きな人だっているし……!!



もうっ!! 早く言いなさいよ!

奏ちゃんなら私も安心!

……ハハ



葵の事ね!?

そうなのね!?

……いやあ

えっ いやっ……



えっ

俺いつも  
叩かれてますけど

それは  
照れ隠し!



いくら  
幼馴染でもさ

普通はちよつと  
距離離れたり  
するじゃない?

でも二人は  
変わらず仲良し  
だもんねえ……



……  
ほんとに

羨ましいわ  
……



家に帰ると  
奏ちゃんの話  
ばっかだもん

奏太奏太って  
ほんとに  
嬉しそうにね!



ほらー  
……



あっ

そんな一気に  
飲んだら……

ぐ  
っ  
っ





お休みなさい  
絵美子さん

葵に連絡  
入れときますね

~~~~~



はい  
着きましたよ  
絵美子さん

……  
絵美子さん？



そ……

奏ちゃん……



何か今日は  
様子変だったな

悪酔いする人じゃ  
ないんだけど



……てか  
葵はまだ  
バイトかよ！

このままじゃ  
帰れねえ……

ん……



でも



やめろって

シヤレに  
なんねーぞ



……  
おいおい



少し

だけなら

……



……  
絵美子さん？

……？  
寝てますよね

スー……



ほんの  
少し



止まらねえ

ヤベツ.....



キリッ

窮屈ではち切れそうじゃねえか

すっげ.....

ブラ越しにこの弾力

ズッ

にゅにゅ



「裸エプロンって

あんたねえ……。

男の子ってこう言うの

好きなの？」

「大好きですよ！」

……やっべえ、超エロい」

ぷっくり立った乳首が

薄い布地に透けて

主張している。

既に受け入れ準備が

できてるようだ。

「もう、台所でこんな

はしたない事させて。

ふざける場所じゃないって

昔教えたわよね」

「でもやって

くれるんですね」

「だって……」



朱

伊

「壮ちゃんのお願ひなら、  
逆らえないわ……♡」

「え、絵美子さん……」  
「さあ召し上がれ……」  
「なんてね♡」

おれ♡

カッ♡



「あんっ♡♡  
ちよっ、ダメえ♡」

俺はたまらず  
絵美子さんの秘部に  
舌を伸ばした。  
小陰唇を丁寧になぞり、  
ぬるぬる分泌した愛液を  
ローション代わりに  
膣口へ舌を侵入させる。

「ひゃっ♡♡あっ♡♡  
はあ……♡♡」  
むせ返る様な  
メスのフェロモンが  
鼻腔に染み込む。  
熟成された膣内は  
味蕾を刺激する  
味わいだ。

蜜壺を堪能しながら、  
クリトリスを舌先で  
入念に転がす。  
「そこっ♡♡んっ♡♡  
いいっ、わあっ♡♡」  
「んむっ、ぢゅっ、  
ふむっうら……!!!」  
俺は一心不乱に  
舐め回した。

ぢゅっ♡♡

ちゅっ♡♡

ぢゅっ♡♡

ぢゅっ♡♡

ぢゅっ♡♡

あっ♡♡

ほあ♡♡

え♡♡

ふ





「あぁっ……♡  
少し、休ませ……っ♡♡♡  
あアぁぁっ♡♡♡♡♡」

アッ♡  
アッ♡  
アッ♡

膨れきつたモノを  
強引に捻じ込むと、  
一際大きな  
唸り声を上げた。

「ふっ！ふうっ……!!  
肉穴絡みついて  
やべえッ……!!」

「はぁっ♡あぁっ♡♡  
挟られっ、ちやっ♡  
ッてるぅ……♡♡♡」

「あぁッ!  
お玉持って下さいッ!  
お玉をっ!!」

「なっ♡♡何よっ、  
それえッ♡♡こっ、  
これでっ♡んっ♡♡  
いいのっ……?♡」

あッ♡  
あッ♡  
あッ♡



「うおおおおッ!!」

「いひイツ♥アアツ♥  
な、何でえツ♥いっ♥  
勢い激しっ♥♥♥♥♥」

その視覚効果は  
絶大だった。

「ぐおおっ……!!」  
射精ます、中で  
射精しますッ!」

「きてっ♥♥♥んっ♥  
来てエツ♥♥♥♥♥」



「んひいいいイツ!! ♡♡♡」

「おっ、おっ、おっ」

「あぁ♡はっ♡  
んあぁあ♡♡♡♡」

「うおっ、おお……」

貯めに貯めた  
精液が搾り取られる。  
それでも尚  
怒張が鎮まる事は  
無かった。

「もう壮ちゃんつたら……私、あんたみたいに若くないんだから」

「すいません、つい盛り上がっちゃって」

騎乗位の往復運動によって、お腹の肉が上下にふるふる揺れている。それは脂肪でなく、熟し、育て上げられた淫塊である。受精の為の生殖器にすら見える。

「これで、最後だからねっ  
終わったら、お風呂入るっ……」

「はっ、はいっ」  
甘ったるい言葉は官能的で、耳もとを愛撫される心地だった。

妻でなく、母でもない。この瞬間に限っては、俺だけの雌でいてくれるのだ。  
「絵美子さん、動きますね」





「んんッ♡♡♡  
んっ……くう♡♡」

体重が離れた瞬間、  
次の着地と重なるように  
腰を突き出す。

「カッ……♡  
っはあああ……♡」

先ほどは  
到達しなかった部位を  
亀頭が擦ると、  
絵美子さんの顔は  
喜悅に歪んだ。

「こっ……れえ♡♡♡  
しきゅっ、当たっ……♡♡♡  
あっ♡♡はあああ♡♡♡」

「すっげ、  
ううっ、おおお……」  
出産を経た膣道とは  
思えない締め付けと、  
子宮のコリコリした  
感触に思わず唸る。

もっと深い所まで届かせたい。

リビング中に水音が

響き渡るくらいに、

突き上げを加速させた。

「絵美子さん、大丈夫ですか。

痛くありませんか」

「んくっ……♡♡♡

へ、へーきよっ♡♡♡」

でもっ♡私が、

動くからあ……♡♡♡」

俺の動きは手で

やんわりと制された。

ちよつと痛かったのかな。

「だい、じょうぢよっ♡♡♡

今度は、私に……♡♡♡

任せてっ……♡♡♡」

ぱんぱん

たん

たん♡

たん♡

ぱん♡

たん♡

たん♡

往復にくねりが  
加えられ、絵美子さんの  
柔らかな膣肉が  
擦り上げるように  
陰茎を刺激する。

「あっ、それっ、  
やばいっ」

腰の律動は  
舞のようで、  
ある種の流麗さに  
満ち溢れていた。



黒い衝動が  
ふっふつと煮えたぎる。  
臀部を鷲掴みにし、  
叩きつけるように、  
下からの突きを  
再開した。

（ああくそっ、この人を  
誰にも渡したくない……。  
あの旦那にも、二度と  
触れさせたくない……！）

柔肌にかかる指を  
さらに食い込ませる。  
しっかりと、奥まで、  
俺の子種が届くように。

「絵美子さん、  
絵美子さんツ！」

「あっ♡♡♡  
ど、どうしたのっ♡♡♡」



「あああッ♡♡♡  
くるっ♡♡♡来ちゃう♡♡♡」

「ひゃあッ!?♡♡♡  
乳首いッ♡♡♡  
や、やめっ♡♡♡♡♡♡」

「おおッ……!!  
射精ます!!」





「あぁっ……♡まっ♡  
まだ出てるぅ……♡♡♡  
「はぁっ、はぁっ、  
はぁっ……」

絵美子さんの  
濡れた口は大きく  
開かれ、行為の  
充足感を物語る様に、  
粘りのある糸が  
光って見えた。

膣から夥しく  
流れ出る白濁の波が、  
着床の気配を  
予感させる。

もし、絵美子さんが  
俺の子供を妊娠したら  
どうなるんだらう。  
その迷妄はしばらく  
頭に残り続けた。



「どう？お望みのチアガール姿  
20年ぶりだと色々キツイわね……♡」

「超可愛いよ、絵美子さん」

かつて、野球部の旦那を  
応援する時に着ていたコスチューム。  
想い出の品だろうに、  
俺が喜ぶならと  
すんなり着用してくれた。



「早くっ♡早くっ♡  
ご近所様に見られちゃうから♡」

「どうですね、  
こんなとこ見られたら……」

「滅茶苦茶  
興奮しますねッ！」

「はアツ♡♡」





「もっ♡もうちよつと♡♡♡  
優しく……♡♡♡」

旦那さんは幾度となく  
この姿で声援を受けて  
きたのだから。  
その奇立ちが抽挿を速めた。

「今日は、この服  
台無しにして  
やりますから……♡」

「……♡  
あの人の事♡♡♡  
気にしてる……♡♡♡」

おっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡



「……ッー」

凶星だ。  
返答代わりに  
抉るような一突き。

おッッッッッ

クッ

クッ

「おッッッッッおッッッッッ」

クッ

クッ





「今はッ！旦那の事ッ！  
忘れて下さい！」

「フヒイッ♡♡♡  
ゴツ♡ごめんなさッ♡  
アアッ♡♡♡」

お仕置きとばかりに  
腰を一心不乱に  
打ち付ける。

「俺のチンポに  
集中しろッ！」

「ひゃッ♡ひゃいッ♡  
今は忘れるッ♡♡♡  
忘れるからあッ♡♡♡」

その小さな勝利感に  
うなじがヒリ付く  
興奮を覚える。

絵美子さんの片脚を  
締め付けるように抱え、  
射精の照準を定めた。

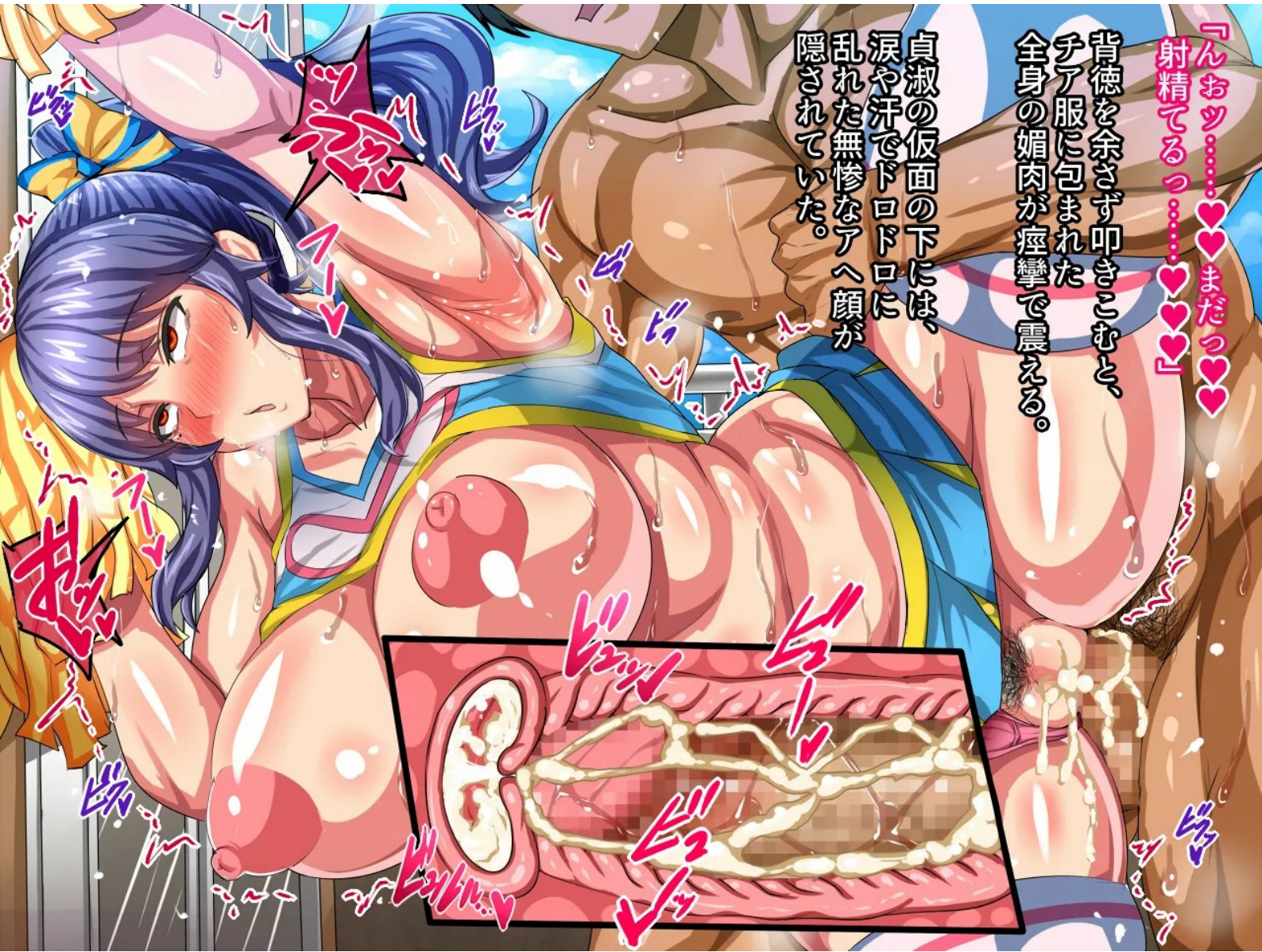


「オラアッ!  
ご近所中にメスイキ騒音  
響かせるオツ!」

「んおツ……♡♡♡まだっ♡♡♡」  
射精てるっ♡♡♡♡♡

背徳を余さず叩きこむと、  
チア服に包まれた  
全身の媚肉が痙攣で震える。

貞淑の仮面の下には、  
涙や汗でドロドロに  
乱れた無惨なアへ顔が  
隠されていた。



汚れた肉棒を丹念に舐め取らせ、屋内でしばしの休息。

だが絵美子さんと寄り添ってキスしたり、イチャついてる内に次の弾が装填された。

「呆れた……」

「まだやるつもり？」

「元チア部っぽい事、してもらいたいなって」

「応援すればいいの？何を？」

あなたが今跨ってるモノですよ、竿の反りを強める。

途端に絵美子さんの目に熱っぽい羞恥が浮かんだ。

「うん……葵の部屋なのよ♡  
母親にそんな事  
させちゃうんだ……♡」

言葉とは裏腹に、  
脂が乗った女尻は  
小刻みに震え、  
竿からは膣口の  
確かな湿りを感じた。

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

「ほら、フレッツフレッツ  
チンポって」  
「もっ……♡  
恥ずかしいわ♡♡♡」





「ああッ！照れてる顔も  
最高に可愛いっすー！」

「も、もういいでしょ……？  
思ったより  
恥ずかしいわコレ……」

ドキ

ドキ

「……足りないですよ」  
むっちりチアコス  
を纏った人妻の  
愛すべき羞恥が  
肉欲に火をつけた。

「もっと絵美子さんの

恥ずかしいところ

見せて下さいッ!」

「んああッ……♡♡」

「ほらほら!自分の  
エロ肉が蹂躪されるの  
応援して!」

ほ



「フレツフレツ  
壮ちゃんツ♥  
子宮目がけて♥  
突き進めツ♥♥♥♥」

「やっべ、それチンポに  
めっちゃ来ます!」

ズン

ズン

ズン



間の抜けた鼓舞と一緒に  
円熟した甘肉が踊り狂って、  
それだけで射精してしまいそうだ。

膣路での往復が速まる。  
鈴口がぶにゅりと  
子宮と接吻する。

「おオッ♡♡ああッ♡♡」

敏感な雌スイッチを  
押し込む毎に、  
淫らな舞いがその軌道を  
大きく変えた。



「はは、ケツ穴弄ると  
どうなるのかな？」

「おツ♡♡お尻らめツ♡♡」

ヒクつく肛門の淵を  
指で丁寧になぞると、  
絵美子さんの肩が  
ビクリと震えた。  
間髪入れず、親指を  
第一関節まで挿入。

「ンオおおおツ♡♡♡」

途端に大きく体をのけ反らせ、  
腸壁の快楽に獣じみた  
咆哮をあげた。

「ほらツ！応援は  
どうしたんです！」

「ひゃッ♡♡ひゃいッ♡  
頑張れ壮ちャッ♡♡  
おチンポ♡♡頑張れッ♡♡」  
「♡……おちッー!」

オオオ

媚肉の締め付けが最高潮に達し、  
導かれるまま熱がこみ上げた。

半狂乱の絵美子さんを

御するようになり、  
双臀を鷲掴みにして

無茶苦茶に突き上げる。

「イぎいッ♡♡♡ンッオオオ♡♡♡」

「ほらッ♡♡も少しで射精ッ♡♡  
イけイけ頑張れ♡♡イっ……♡♡」

オオオ

ズッ♡♡  
ズッ♡♡

ズッ♡♡  
ズッ♡♡



「イッ  
グ  
……ウ  
ウ  
ウ  
ウ  
ウ  
」



Large pink stylized characters, possibly reading 'アッ' (A), overlaid on the left side of the image.

Large pink stylized characters, possibly reading 'アッ' (A), overlaid on the bottom right side of the image.

応援の甲斐あって、  
膣から溢れ出る程の  
大量の精が迸った。

「おッ♡♡♡ンおおおッ……♡♡♡♡♡」

極度のアクメに達したのだから、  
大きなエビ反りで頭が  
天井に届かんまでの勢いだ。







「ちよつとこんな所で……！」

「すみません

ちよつと我慢できなくて

……ゆっくりやりますから」

「ああんっ♡♡♡♡  
いきなりっ♡深っ……♡♡♡」

私が止めなくちゃ  
いけない立場なのに。  
こんなバブルの残骸みたいな  
服着て火照った体は  
彼の侵入をあっけなく許した。

はっ♡  
はっ♡  
はっ♡  
はっ♡

「ひぐっ♡はあっ♡アああっ♡  
アソコがっめくれちゃうっ♡♡♡」

「壁で肌擦るといけませんからね、  
早く射精しますからっ……」

そう思うなら  
もう少し我慢すれば  
いいのにな……♡

彼の僅かな理性と裏腹に  
腰遣いは苛烈さを増して、  
結合部から弾けた飛沫が  
アスファルトに飛散する。

不衛生な路面が愛液で  
塗れる背徳感と、  
彼から激しく与えられる  
官能とで頭がぐちゃぐちゃた  
なって……。



「んっおっオオ♡♡ほおおおオオッ  
おオおお~~~~ッ♡♡♡♡♡」

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ

獣染みた声で  
果てた。

迸る精液。なおも続く抽送。  
支えられた脚が思わず跳ね、  
たまらず彼にしがみつく。

「そんな声あげちゃダメですよ  
絵美子さん。ほら、あつちの人が  
見てる」

おっ

おっ

もうそんな事は些細な  
問題だった。早くこの子に  
ちゃんと抱いてほしい。  
下品なネオンが初めて  
愛おしく感じられた。

「奏ちゃんだったら……♡  
あんなに激しく押し付けるから、  
擦りむいちやっただじゃないの……♡♡」

「すいません、俺  
抑えが利かなくなつて……」

ラブホテルの一室。  
彼の為に用意した扇情的な下着に  
着替えるや否や押し倒され、  
愛撫が始まった。

下腹部から始まり、  
丹念に首筋まで。

んあ♡

子犬みたいにペロペロ体中を舐められて、  
発情した体は冷めることなく  
むしろ彼のモノを受け入れる  
期待とドキドキで蕩けそうになった。

ドキ♡

ドキ♡

ドキ♡

むち♡  
むち♡

んっ♡

んっ♡  
んっ♡

「ねっ、ねえっ♡♡♡  
舐めるのもいいけどぶやけちゃうからっ  
もっど、他の部分もっ……♡♡♡」

「はは、他の部分じゃ  
分かりませんよ。  
どこですか？」

「はは、他の部分じゃ  
分かり切った答え。  
彼に教え込まされた  
答えをたまたらず叫ぶ。」

「おっ……♡おマンコッ♡♡♡  
おマンコいじってツ♡♡♡  
奏ちゃんの指で  
ぐちゅぐちゅしてえッ……♡♡♡」  
「可愛いな  
絵美子さんは……ほらッ」

「んんんんツツ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」  
「ずいゆり——と指が  
花卉に侵入する。  
短く深いアクメが一気に  
脳裏までかけのぼった。」





「はっ♡はっ……♡  
はあああああ♡♡♡♡♡  
おっ♡♡♡ほおっ♡♡」

「指だけでこんなに  
イッチャうとか……  
恥ずかしくありませんか？  
ほら、マスコすげえ  
洪水みだりになってますよ」

「恥ずかしさと気持ち良さで呂律が回らない。  
私を責め立てる言葉と、  
背筋に当たっている彼の肉棒の熱で、  
「スイッチ」が入ったのだと分かった。」

「休んでいる場合じゃないでしょ絵美子さん。  
こんな軽い愛撫で参ってたら、  
これ使ったらどうなっちゃうんでしょうね」

「はっ……♡♡♡へえっ？♡♡♡」

「ひゃあああッ……♡♡♡  
みないでえっ♡♡♡」

「そっ♡奏ちゃんが  
激しくすりゆから  
でしょおっ……♡♡♡」

「……これ？使う？  
疲弊した頭では彼が  
何を言ってるのか呑み込めない。  
何を……何をを使うんだろう？  
もう、私はこんなにも  
気持ち良くなっているのに」









みっともなく分泌物を撒き散らして、  
ベッドをぐしゃぐしゃに汚して、  
私はこの日で一番の絶頂を迎えた。

「ほあッ♥♥はあッ♥♥はあッ♥♥  
んはあああああッ♥♥♥♥♥♥♥♥

脂汗がひどい。  
何とか一息ずつ呼吸を試みるのに、  
下腹部の強烈な余韻が  
邪魔して息が絶え絶えになる。  
腰が砕けて奏ちゃんに  
身を預ける形になってしまう。

「めちゃくちやイきましたね、絵美子さん。  
そんなにごれ良かったですか？」

「ひゃあっ♥♥うっ♥♥うんっ.....♥♥♥♥  
これっ♥♥しゅいよおおおっ.....♥♥♥♥

「.....ふん」

不服そうに立ち上がり、  
彼は反り立った肉棒を  
見せつけてきた。

あんなあんな

